

巻頭言

研究結果は“記憶”ではなく“記録”に残そう

2012年のノーベル医学・生理学賞は、あらゆる細胞に成長可能で再生医療の実現につながる iPS 細胞を初めて作製した、京都大学の山中伸弥教授と英国ケンブリッジ大学のジョン・ガードン名誉教授の2人が受賞した。山中教授らは、iPS 細胞の作製からわずか6年で、ノーベル賞受賞という研究の頂点に立ったのである。とは言え、それまでの有名無名の先人たちの研究の積み重ねが基礎となっていることは、否定できない事実であろう。

エジプトのピラミッドは、しっかりした岩盤の上に巨大な石をひとつひとつ精巧に積み上げていくことで建てられており、4500年以上の時を経ても傾いたり地盤沈下を起こして沈んだりしていない。この頂上の最後のひとつの石はキャップストーンと呼ばれ、太陽神ラーの魂が宿る場所と信じられていた。しかし、キャップストーンのみならず、たとえ途中の石であっても、ひとつひとつが確実に積み重ねられることなしには、キャップストーンにまで至らないし、ピラミッドは崩れてしまったことであろう。山中教授らのノーベル賞受賞研究をピラミッドのキャップストーンに例えるならば、私たちの日々の研究は途中の石のひとつに過ぎないのかもしれない。しかし、注目されないひとつの石にも必要かつ十分な価値があり、無意味な研究などひとつもないはずである。ただし、“記憶”ではなく論文という“記録”に残さなければ、ピラミッドの石のひとつにはなりえないし、誰の成果かはいずれ忘れ去られてしまう。

1929年、ドイツの研修医ヴェルナー・フォルスマンは、強心剤を直接心臓に注入すれば、より有効な治療ができるはずだと考えていた。自分の左肘の静脈にゴム製のチューブ（尿道カテーテル）を挿入し、右手でチューブを心臓へと押し進めていった。そしてチューブの先端が右心房まで到達したことをX線で確認したのである。しかし、「まるでサーカスの見世物だ！」と教授に罵倒され、失意のうちに病院をはなれて、静かな開業医生活をおくることとなった。それから27年後の1956年、フォルスマンは心臓カテーテル法に関する業績に対し、その実用化に貢献した2人の米国の研究者とともに、ノーベル医学・生理学賞を受賞したのである。実はほぼ同じ時期に、他の研究者も同じような実験を成功させていたらしい。しかし最終的には、実際にカテーテルが右心房まで入ったX線フィルムという“記録”を残していたことが決め手となり、フォルスマンが受賞したのである。

本学の看護学ジャーナルも第10巻を刊行することになった。ピラミッドのキャップストーンか否かにかかわらず、研究結果はどのような形であれ“記録”に残さなければならない。そういう意味でも、今回投稿していただいた先生方に感謝するとともに、第11巻にはさらに多くの先生方から寄せられることを期待したい。

2013年3月

広島国際大学看護学部 学部長 島谷 智彦